ISSN 0917－4729

北方民族博物館だより

No.123

H23.38　魚皮絵画＜ヌイヴォ湾＞　ウイルタ　ロシア／サハリン州／ノグリキ
17.9×17.9cm　2011年収集、ヴェロニカ V. オシポワ制作

ヴェロニカ V. オシポワ氏（1966-）はウイルタの芸術家で、魚皮・獣皮・樹皮などの伝統的な素材を活かした制作活動を行ってきた。特に、魚皮をコラージュし、地元の先住民（ウイルタ、ニブフ、エベンキ、ナーナイ）の生活や伝説などをモチーフとして絵画を描くのが、彼女の代表的な作風となっている。本資料もその手法で生み出された作品のひとつで、なめしたシロザケ、タラ、コマイの皮を組み合わせ、サハリン島北東部のヌイヴォ湾岸で暮らす先住民の生活風景を描いている。本資料の収集以降、オシポワ氏は活動の幅を飛躍的に広げ、州外・国外の展覧会への出品や個展の開催などを精力的に行っている。

目次　Contents

1　表紙　魚皮絵画＜ヌイヴォ湾＞
2-4　第35回北方民族文化シンポジウム 網走
　大林太良・学問と北方文化研究―大林太良先生没後20年記念シンポジウム
5　特別展関連講座　西シベリアの働き者―トナカイの飼育とイヌ
　／特別展関連講座　ロシアのトナカイ牧畜―歴史・現状・展望
6　ロビー展　写真で振り返る日本のアラスカ調査
　／講座　日本調査隊のアラスカ考古学への寄与
7　日本北方言語学会 第4回研究大会（兼国際シンポジウム）
　／はくぶつかんクラブ・講習会　紙ストローでつくるヒンメリ・ヒンメリづくり
8　INFORMATION

北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

第35回北方民族文化シンポジウム 網走

大林太良・学問と北方文化研究

大林太良先生没後20年記念シンポジウム

2021.10.16-10.17

主催：一般財団法人北方文化振興協会・
　　北海道立北方民族博物館
後援：網走市、網走市教育委員会、北海道民族学会、
　　北海道考古学会、北海道博物館協会

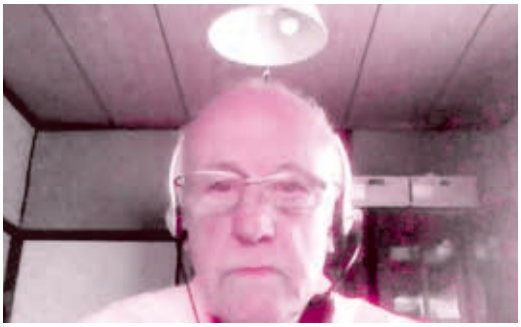
今年度のシンポジウムは、当館初代館長・大林太良先生の没後20周年を記念して、先生の業績を振り返り、今後の北方文化研究の方向性と展開を検討する内容としました。以下に各発表の概要を報告します。

【第1部】大林先生の学問研究とその魅力

「大林太良先生の歴史民族学のルーツ―岡正雄、R. ハイネ＝ゲルデルンとA. イエンセンの恩師たち―」

（クライナー ヨーゼフ氏/ボン大学）

大林太良が最重視したのは、アイヌを含む日本民族文化の起源と形成を、歴史的観点、宗教観念と神話の分析から解明する試みだった。その基礎は東大での学生時代に固められ、都立大の岡正雄により決定づけられた。4年に及ぶ海外留学では、R.ハイネ＝ゲルデルン、A.イエンセンなどとの交流から、歴史民族学、神話学と東南アジアへの関心を深めた。アイヌのチセに関する大林の初めての学術論文は、1956年にウイーンで執筆された。これは後の北方民族博物館での活躍につながる第一歩であると同時に、大林の課題だった日本と諸外国の研究の橋渡しの実例でもある。



クライナー　ヨーゼフ氏

「周縁部から見る中国のエスニシティ―雲南省大理盆地のペー族の動態」（横山廣子氏/国立民族学博物館）

中国社会でペー族あるいは少数民族を考える際、漢族や中国文明との関係をどう捉えるかは重要である。大林先生はある地域の諸文化を、高文化（大伝統）と地方文化（小伝統）との相互関係というモデルで考察した。発表者も同様に、伝統的中国社会におけるペー族の位置づけを図式化して捉えることができた。

大林先生の民族学・人類学は、膨大な文献の渉猟にもとづく、深い文化史的考察を特徴とする。発表者も史料分析を通じ、中央と地方の視点の対比、地方エリートのスタンスに着目することで、中国におけるエスニシティの動態を理解できた。

横山廣子氏

「大林太良先生の神話学」（松村一男氏/和光大学）

大林先生は、神話学に関する一般読者向けの著作を多数出版している。入門書としては、日本神話の成り立ちを論じた『日本神話の起源』、日本初の入門書『神話学入門』、アンソロジー『世界の神話』、テーマ・地域別に世界の神話を紹介した『世界神話事典』、日本神話に関する『日本神話事典』がある。一方、講演会などでの発表を基にした論文集も多数出版されている。これらを紹介しながら、大林神話学の全体像と日本の神話学研究の現状を概観した。

松村一男氏

「大林太良の遺産」（石井正己氏/東京学芸大学）

大林太良は、人類文化史に対する確かな認識を持っていた。大林は先人の業績を広く見直し、研究の土台を築いた。「海上の道」にしても照葉樹林文化論にしても、20世紀後半の日本民族起源論は南方文化に傾斜しており、大林もその影響を強く受けていた。北方文化も意識されたが、南方文化ほどに研究は成熟しなかった。大林の遺産を北方文化から再評価することにより、21世紀の民俗学研究の方向性を考えた。

石井正己氏

「牧畜民的な集団観の今：チンギス・ハーンのカザフ人末裔たちとのめぐり合いから」（シンジルト氏/熊本大学）

現在も多くの「トレ」（チンギス・ハーンの長男ジュチの末裔）が、中国のカザフ人コミュニティで生活している。本発表では、(1)トレの現状を踏まえ、(2)彼らにとって系譜、民族、国家がどのようなもので、それらが互いにいかに関わりあっているのかを、彼らの視点から復元することで、(3)牧畜民の属人的な集団観の「今」をスケッチし、(4)生人（自己）が主体として故人（他者）を利用し、故人が客体として生人に利用されるのだ、という解釈モデルの問題点を指摘した。

シンジルト氏

【第2部】北方文化研究の可能性

「国立アイヌ民族博物館の役割―アイヌ文化研究の方向性―」（佐々木史郎氏/国立アイヌ民族博物館）

本発表では、発表者が館長を務める国立アイヌ民族博物館におけるアイヌ文化研究について紹介する。

国立アイヌ民族博物館（2020年7月開館）の調査研究活動は「アイヌの歴史・文化基礎研究」と「博物館機能強化のための研究」に分けられる。前者はアイヌの歴史と文化に関する基礎的研究で、多くの研究分野が関わり、テーマごとに学際的なプロジェクトを立てる。後者は民族資料の保存・修復技術、教育方法開発などの実践的、応用的研究で、博物館そのものを支えるのに欠かせない研究である。

佐々木史郎氏

「環北太平洋地域の先住民文化に関する比較研究―大林太良と渡辺仁の視点」（岸上伸啓氏/人間文化研究機構・国立民族学博物館）

環北太平洋地域の先住民間には文化的共通性があることが知られており、その歴史的・言語学的関係に関して、大規模なプロジェクト研究が行われてきた。本報告では、1980年代におこなわれた大林太良による歴史民族学研究と渡辺仁による生態人類学研究を比較する。その上で、交易に焦点を当てた国立民族学博物館の研究プロジェクトを紹介し、研究の現状と課題について検討を加えた。

岸上伸啓氏

「北方狩猟採集民文化の形成：民族起源論から集団系統論へ」（加藤博文氏/北海道大学 アイヌ・先住民研究センター）

大林は、シャマニズムや熊送り儀礼を通して北ユーラシアに広がる基層文化の存在を指摘した。本報告では、北ユーラシア地域の集団形成に関する考古学・人類学による近年の研究動向を概観した。また北大アイヌ・先住民研究センターの研究構想における北ユーラシアの研究フィールドとしての潜在性と、国際共同研究の新たなフィールドとしての可能性について報告した。

加藤博文氏

「エミシ研究とシベリア研究における民族学的視座」（高倉浩樹氏/東北大学東北アジア研究センター）

アイヌと古代蝦夷に関わる比較研究を対象に、大林氏の方法と知見の今日的意義を検討した。大林氏の研究の特色は、民族誌資料から系統と起源を読み取るというものだが、その結論は現在の理論からは批判されるだろう。しかし、民族誌資料の特徴を丹念に読み込み、そこから分析するという手法、そして大林氏の研究上の問いに係わる思考枠組みについては再考されて良いとい考える。本発表ではこの2点の可能性を探究した。

高倉浩樹氏

「日本の北方文化研究における千葉大学の役割と日露研究協力関係」（吉田睦氏/千葉大学）

本発表では、日本における北方文化研究に千葉大学が果してきた役割を概観する。

1994年、千葉大文学部に「ユーラシア言語文化論講座」が設置され、以来、金子亨（言語学）、中川裕（アイヌ語・アイヌ文化研究）、荻原眞子（北方民族文化研究）らがロシア各地の研究機関との共同研究などを通じ、北方文化研究に貢献してきた。ロシアのアイヌ資料研究はその一例である。その後、中国・内陸アジア研究者も加わり、発表者（ロシア北方民族研究）と共に本研究拠点を維持している。

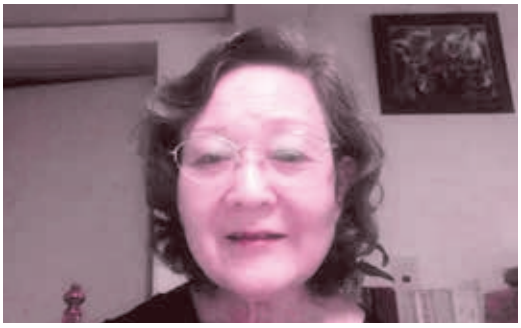
吉田睦氏

「北方研究における大林太良博士の功績とその言語学的意義」（呉人恵/北海道立北方民族博物館）

北方民族博物館は、北方地域を文化的連続体「北方文化圏」として捉えるという大林先生の構想が色濃く反映された、世界的にもユニークな博物館である。本発表では、大林先生の北方文化圏に関する論考を言語学的観点から再解釈することにより、北方諸民族の歴史的相互関係解明の展望を考えた。また、当館が今後いかに先生の遺志を継承し、北方文化研究上の役割を果たすべきかを探った。

呉人恵館長

これらの発表のほか、運営委員の荻原眞子氏（千葉大学）にはシンポジウム全体の趣旨説明をしていただきました。



荻原眞子氏

本シンポジウムは、新型コロナウイルス感染防止の観点から、初めてオンラインで開催されました。二日間、9:00～16:00の長時間にわたる催しでしたが、日本各地から70名を超える方に参加いただきました。（学芸グループ　中田篤）

特別展関連講座

西シベリアの働き者
―トナカイの飼育とイヌ―

2021.8.28（オンライン開催）

講師　大石侑香氏（神戸大学大学院国際文化学研究科・講師）

特別展の関連事業として、ロシア・西シベリアのトナカイ飼育を紹介する講座を開催しました。講師の大石氏は、日本では数少ない西シベリアをフィールドとする気鋭の文化人類学者です。この講座では、特にトナカイ飼育におけるイヌの役割に注目しました。

大石侑香氏

最初に、イヌがいつ、どのように人間と一緒に暮らすようになったのか、また牧畜文化のなかで、イヌがどのような役割を果たしてきたのかという点について、考古学や家畜文化史の最新の研究成果を元に紹介いただきました。

続いて大石氏自身の10年にわたる現地調査から、西シベリアのタイガ地域に暮らすハンティのトナカイ飼育についてお話しいただきました。この地域では、トナカイ飼育と漁労、狩猟、採集が複合的に営まれています。また、トナカイ飼育には季節的な放牧地の移動が不可欠ですが、群の大きさによって移動パターンが異なるということでした。

最後にトナカイ飼育で活躍するイヌについてのお話です。ハンティの各世帯では必ずイヌを飼っていて、狩猟やトナカイの管理に利用しているそうです。現地では「良いイヌさえいれば、トナカイを集めるのはそう難しくない」、「イヌなしではトナカイの飼育はできない」と語る人がいるくらい、トナカイ飼育にイヌは不可欠な存在です。イヌは放牧中のトナカイを集めたり、群を一ヶ所に留めたり、群を誘導したりなど、さまざまな場面でトナカイ群の管理に活躍しています。また、トナカイ群を外敵から守る役割も担っているということでした。

本講座は、講師、受講者ともにオンラインで参加いただく形での開催となりました。多数の写真や動画により、西シベリアの風景やイヌを使ったトナカイ放牧の様子に触れることができ、受講者の理解も深まったと思います。

（学芸グループ　中田篤）

特別展関連講座

ロシアのトナカイ牧畜
～歴史・現状・展望～

2021.9.11（オンライン開催）

講師　吉田睦氏（千葉大学文学部・教授）

ロシアは世界でもっとも多くの家畜トナカイを飼育する国です。本講座では、本場・ロシアのトナカイ牧畜の全体像について、その歴史や変遷、現状を紹介いただきました。講師の吉田氏は、ロシアのヤマル･ネネツ自治管区、サハ共和国などでトナカイ牧畜民の生業や食文化を研究してきた文化人類学者です。

講座では、導入としてトナカイという動物の特徴、世界のトナカイ牧畜の概要とロシアが占める位置についての説明がありました。世界の家畜トナカイは約250万頭で、その76%がロシアで飼育されているとのことです。

その後、ロシアのトナカイ牧畜の1)歴史、2)現状、3)展望と大きく3つのテーマでお話しいただきました。

「歴史」では、トナカイ牧畜の起源、ロシア革命前、ソ連期、ソ連崩壊後のトナカイ牧畜の状況、飼育頭数の推移と社会変化の関係などについて、統計資料のデータや各地の事例を含めて紹介いただきました。

「現状」では、ソ連崩壊後から現在までのトナカイ牧畜の状況について、ロシア国内の地域や民族による違い、その社会的、政治的背景に関して解説していただきました。近年、ロシア全体のトナカイ飼育頭数は増えていますが、そのほとんどがヤマル･ネネツ自治管区の増加によるものということです。

最後に「展望」では、地下資源や森林の開発、地球温暖化によって、放牧地の荒廃や喪失が起きる可能性が指摘され、トナカイ牧畜の将来に関する展望が示されました。

本講座も、講師、受講者ともにオンラインでの参加となりました。当館にお越しいただけなかったのは残念ですが、受講者の大半が網走市外や道外にお住まいの方で、オンライン形式の長所が現れた形となりました。

（学芸グループ　中田篤）

吉田睦氏

ロビー展

写真で振り返る日本のアラスカ調査

2021.10.30-12.12

主催：北海道立北方民族博物館
共催：北極域研究加速プロジェクト（ArCS II）

当館第二代館長の岡田宏明、第四代館長の岡田淳子ご夫妻は日本におけるアラスカの人類学的、考古学的調査のパイオニアとして知られています。岡田夫妻は1960年から約40年にわたりアラスカ各地を調査し、数万枚に及ぶ写真を撮影しました。文部科学省の補助事業として実施されている「北極域研究加速プロジェクト（ArCS II）」では、2020年より夫妻が撮影した写真のデジタル化を進めています。本展はその中から約40枚の写真を選定し日本によるアラスカ調査の軌跡を追います。

会場の様子

展示では年表と地図を使って夫妻のアラスカ調査の概要を解説した後、夫妻の調査を4期に区分してそれぞれ写真を紹介しています。第一期は1960年代の明治大学によるアラスカ学術調査です。ポイントバロー、ポイントホープ、アナクトブックパス、ネルソン島の各地のエスキモーの写真が含まれており、特にポイントバローでのクジラ猟は印象的です。

第二期は1972～1984年のポートモラーのホットスプリング遺跡の発掘と、並行して行われたネルソン島調査です。ホットスプリング遺跡では、厳しい気候条件にも関わらず発掘を楽しんでいる調査隊の姿が写っています。またネルソン島ではこの頃からスノーモービルが使われているなど、1962年調査との違いが興味深いです。

第三期は1987～1990年のヘケタ島チャックレイク遺跡、プリンス・オブ・ウェールズ島ハンターベイの発掘です。この周辺は北西海岸先住民の文化圏ですが、同じアラスカでもネルソン島やポートモラーと全く違う森林地帯となっていることが印象的です。

第四期は1996～1999年にかけてのアネット島メトラカトラの調査です。北西海岸先住民のツィムシアンのコミュニティであるメトラカトラでは伝統的な儀式の写真と並び、水産工場で日本向けのイクラを製造する様子など伝統と近代の共存している様子が興味深いです。本展を通じ、日本のアラスカ調査の成果のみでなくアラスカや先住民社会の変化も考えていただけたならば幸いです。

（学芸グループ　野口泰弥）

講座

日本調査隊のアラスカ考古学への寄与

2021. 10.31

講師　岡田淳子氏（当館 元館長）

ロビー展の関連事業として当館第四代館長の岡田淳子氏に、日本のアラスカ調査隊の成果について講演いただきました。今回は1960年～1984年までの調査を対象とし、筆者が聞き役となり、考古学だでけではなく人類学的成果についても対談形式でお話を伺いました。

岡田淳子氏

はじめに日本のアラスカ調査の経緯についてお聞きしました。日本調査隊のアラスカ調査は1960年、明治大学の創立80年記念事業の一環として行われたアラスカの学術調査に端を発します。当館第二代館長の岡田宏明氏はこのとき考古学班として南西アラスカのホットスプリング遺跡の発掘に参加しました。その後、宏明氏は1962年、1967年に行われた民族学班の継続調査に参加し、アナクトブックパス、ポイントホープ、ポイントバロー、ネルソン島などで、エスキモーのクジラ猟や伝統文化について研究を行いました。

その後、1972年から1984年にかけて岡田夫妻が中心となりホットスプリング遺跡の発掘を行いました。この調査では、ホットスプリング遺跡に関する重要な発見が多くなされました。例えばこの遺跡が集落遺跡であり、歴史的に幾つかの異なる集団によって使われてきたこと、そして最初に居住した人々は、アリューシャン列島からではなく、アラスカ北部からやってきたことなどが分かりました。出土した人骨は時代ごとに異なる方法で埋葬されており、これは遺跡を残した集団の入れ替わりを示している可能性もあるそうです。この発掘に基づいた研究発表は1989年の汎太平洋先史学会議で賞を受賞し、2002年にはホットスプリング遺跡発掘の業績がアラスカ人類学会で顕彰されました。

ホットスプリング遺跡の発掘に並行し、1974年～1980年にはネルソン島でも調査が行われました。ここでは主に居住形態について調査が行われ、人々が35～40年ごとに住む場所を変えていることを突き止めました。その理由は様々ですが、長く住むことによる家屋の老朽化や汚れが理由の一つのようです。70年代からスノーモービルやモーターボートが普及したことなどにより、季節移動をやめて定住するようになったことが、現地の社会の大きな変化だったと考えられるそうです。

（学芸グループ　野口泰弥）

日本北方言語学会

第4回研究大会（兼国際シンポジウム）

2021.11.6-11.7

会場　当館講堂

11月6日、7日の両日にわたり、日本北方言語学会と当館の共催による第4回研究大会（兼国際シンポジウム）が開催されました。当館としては、博物館での参加者と国内外からの参加者がZoomを通して発表や議論をおこなう、ハイブリッド方式での初めての試みとなりました。

日本北方言語学会は、日本における北方言語研究の発展を目的に2018年に設立され、この3年間で80名あまりの会員を数えるまでになりました。対象とする言語も30を超え、北方言語研究では世界的にも大きな学会に急成長しています。網走での国際シンポジウムは、学会活動に設立当初から関わってこられた故津曲敏郎前館長の願いでもありました。前館長も参加されて開催される予定だった国際シンポジウムは、残念ながらその追悼記念となってしまいました。

発表は、アタヤル語、キルギス語、ウズベク語、チュヴァシ語、モンゴル語、保安語、アイヌ語、ユカギール語などの個別言語に関する研究と北方諸言語を俯瞰した類型論的研究の計12件ありました。海外からは、津曲前館長が生前親しく交流されていたフィンランドのJ.ヤンフネン氏、E.グルズデヴァ氏、ロシアのA.M.ペヴノフ氏、韓国の高東昊氏による津曲前館長追悼の優れた講演が加わりました。また、ウラジオストク日本センター所長の宮川琢氏（当館友の会会員）からは、津曲前館長が熱心に現地調査されていたクラスヌィヤール村のウデヘ語の現状に関する最新情報が報告されました。白熱した議論が交わされる、非常に充実した二日間となりました。

研究大会の様子

当館は、新型コロナウイルス感染症の影響により、今年8月から徐々にオンラインイベントを導入しています。特別展関連講座や第35回北方民族文化シンポジウムでは、Zoomウェビナーとパブリックビューイングを組み合わせるなど、網走でも、日本各地からでも当館のイベントに参加できる仕組み作りに努めてきました。

今回の学会大会にもそのノウハウが生かされ、新たに海外ともオンラインによって繋がる可能性も開かれました。

（館長　呉人惠）

はくぶつかんクラブ／講習会

紙ストローでつくるヒンメリ／ヒンメリづくり

2021. 11.27 ／ 11.28

講師　山本睦子氏　（ヒンメリ作家）

フィンランドの伝統装飾品であるヒンメリづくりの講習会を二日間行いました。講師にはヒンメリ作家の山本睦子氏をお招きしました。

一日目は小中学生対象のはくぶつかんクラブ「紙ストローでつくるヒンメリ」を開催しました。はじめに10cm×7cmに切った紙をまるめてストローを12本つくります。できあがったストロー3本に糸を通して三角形をつくり、そのあとストローを2本ずつ付け足していくと、三角形が5つ並びます。残ったストロー1本に糸をとおし、最初に残しておいた糸とつなぐと立体になります。最後に開いた頂点部分を別糸で結ぶと正八面体ができあがります。タッセルを垂らしたり、カラフルな毛糸を飾りにつけたりして、思い思いのヒンメリができあがりました。

はくぶつかんクラブの様子

この「紙ストローでつくるヒンメリ」は、北方民族博物館が新型コロナウイルス感染拡大防止で休館した時におうちミュージアムのために山本さんが考案してくださったプログラムです。自宅にあるものでヒンメリづくりが楽しめるように工夫されています。作り方は当館公式サイトからダウンロードできます。

2日目は一般向けに講習会「ヒンメリづくり」を開催しました。大きさの異なる正八面体3つと、二等辺三角形のはいった1つをつなげた、ボリュームのあるヒンメリをめざしました。本来の材料であるライ麦を使い、ウッドバーからバランスを考えながらつり下げました。

講師の丁寧な指導で講習会は順調にすすみ、心配された二等辺三角形のパーツも問題なくしあがりました。参加者からは家のどこに飾ろうかと、うきうきとした声がきかれました。

（学芸グループ　笹倉いる美）

ロビー展「道東の擦文文化」

北海道では、紀元後7世紀ごろから12世紀ごろにかけて、擦文文化がみられました。とくに北海道東部には、擦文文化の終わり頃の遺跡が多くみられるという特徴があります。

ロビー展では、当館が網走市の美岬4遺跡と能取岬西岸遺跡、また湧別町の川西オホーツク遺跡を発掘調査した際に出土した擦文土器を展示します。

■会期：2022年1月4日（土）～1月23日（日）
■会場：北海道立北方民族博物館ロビー
■主催：北海道立北方民族博物館
■観覧料：無料
■関連事業：
①解説会「ロビー展解説会」
　日時：2022年1月16日（日）13:30～14:00
　講師：種石悠（当館学芸員）

②講座「土器からみた擦文文化の地域間交流と道東部の遺跡群」
　日時：2022年1月23日（日）10:00～11:30
　講師：榊田朋広（札幌市文化財調査員）

能取岬西岸遺跡の擦文土器

ロビー展「オホーツクシリーズ⑮　北の状景から」

オホーツク地域の文化的活動を紹介・発信する展示イベント「オホーツクシリーズ」の15回目として、オホーツク地域の魅力を伝える写真作品を紹介します。

■会期：2022年1月4日（土）～1月23日（日）
■会場：北海道立北方民族博物館ロビー
■主催：北海道立北方民族博物館
■観覧料：無料

「ミス エゾモモンガ」　　撮影：橋本敏一

INFORMATION

行事報告

◆10月2日（土）はくぶつかんクラブ「北方民族の太鼓をつくろう」（講師：菅原章子解説員）を開催しました。

うまく作れたかな？

◆10月3日（日）録画上映会として8月28日に行われた大石侑香氏の講座「西シベリアの働き者：トナカイの飼育とイヌ」、9月11日に行われた吉田睦氏の講座「ロシアのトナカイ牧畜」の録画映像を当館講堂で上映しました。

◆10月9日（土）はくぶつかんクラブ「まが玉づくり」（講師：塩谷舞解説員）を開催しました。

上手にできたね！

◆10月10日（日）上映会「北方民族博物館シアター秋」にて「遊牧する家族ナジェージダ（希望）」「トゥバの人々：トゥバ共和国編」を上映しました。

◆10月10日（日）解説会「特別展解説会」（講師：中田篤学芸員）を実施しました。

◆11月13日（土）解説会「ロビー展解説会」（講師：野口泰弥学芸員）を実施しました。

◆12月11日（日）講習会「サミのひも織り」（講師：笹倉いる美学芸主幹）を実施しました。

行事の中止

新型コロナ感染症蔓延防止のため、下記の行事は中止になりました。

◆11月3日（水・祝）「第12回はくぶつかんまつり」

◆12月「ロビーコンサート2021　青少年のための室内楽の夕べ」

◆2月11日（金・祝）「第32回北方民族博物館記念感謝DAY」イベント

北方民族博物館だより
No.123
令和3年（2021年）12月22日発行
編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888　Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org
指定管理者
一般財団法人北方文化振興協会